

「信仰によって生きる」
ハバクク 2:18-20 (2:4)

【1】序

今日は平和を祈る礼拝。8月に入ると私たちの国ではどうしてもかつての悲惨な戦争に思いを向けねばならない。それとともに、平和を祈るものである。その際にキリスト者が忘れてはならないことがある。それは、戦時中の迫害の歴史である。この迫害の歴史を心に刻み、信仰の危機に至る人間の罪に思いを向けたい。

【2】曖昧な信仰

迫害の中、日本プロテスタント教会はすべての教会が合同して日本基督教団を設立した。これは画期的な出来事であったが教会を守るために、一致して戦争に協力し、献金を軍隊にささげ、神社参拝を許した。このことは、十戒の第一戒を犯すことであった。

現代を生きるキリスト者は当時の人々を安易に責めることはできない。しかし、今この時代にあっても私たちは世間の雰囲気の中にあって意識的、無意識的に関わらずただお一人の神への信仰が骨抜きにされていくという危機にあることを忘れてはならない。特に今年には新元号が発表され、天皇の代替わりに向けたお祝いムードにある。このとき、私たちは世間の波に流されるのではなく、この国で行われていることが私たちの信仰とどのように関わっているかしっかりと考え、目を覚ましていなければならない。

出エジプトの際、イスラエルは偶像礼拝の罪を犯した。しかし、彼らは「像」を造ったがそれによって創造者を表そうとしたのである。それは善意から出たことであったとしても致命的な行為

であった。イスラエルが置かれていたカナン地域においては子牛の像は偶像バアルを崇拝することにつながっていたのである。彼らは無意識の内にイスラエルの神と偶像とを混同してしまったのである。

信仰の曖昧さは真の信仰を骨抜きにする。「神社参拝は宗教ではない」と言っただけであると戦時中の教会は考えた。しかし、実際にはキリストの仮面を被った天皇教を推進したのであった。それはかつてイスラエルが置かれていた状況にも似ている。

【3】ハバククのメッセージ

旧約時代の預言者が置かれていた状況もこのような神話と国家が結びついた状況であった。ハバククはこの時代の中で繰り返し「わざわざ」と訴えた。人々は木や石に向かってそれがあたたかも生きているかのように振る舞っている。しかしそれらは、物言わぬ偽りの神々に過ぎない。彼らもこのことをわかっていた。あえてハバククはこのことの虚しさを指摘している。

【4】信仰によって生きる

神の御前に正しい、義であるとされるには「その信仰」が必要である。あいまいな宗教心ではなく、イエスのみが主であるという明確な信仰である。日本における天皇制は単なる習俗ではなく「宗教」であることをよく意識する必要がある。

真の救い「正しい」と認められ真に「生きる」者は明確なキリストへの信仰が伴うのである。この世にあっても私たちは死に勝利したキリストにある希望、恵みによって生かされているのちの喜び、天地万物の主である神への信頼に確信を持って生きたい。